

## リオタール『言説， 形象』を読む

### ——二つの否定性から形象へ——

渡邊 雄介

#### はじめに

本論では、20世紀フランスの哲学者、ジャン・フランソワ＝リオタールの主著である『言説， 形象』の読解を行うが、その中でも、「言説(discours)」という本著作での中心概念が「形象(figure)」の問題へとどのようにつながっていくのかを問題にした。今までにもジェフリー・ベニントンやビル・レディングスによって、『言説， 形象』の議論の整理を目的とした論考は書かれてきた<sup>1</sup>。しかし、『言説， 形象』の第一のパートである「意義と指示」の問題系から、どのように「形象」を問題にした「他なる空間」というパートへと移っていくのかということは、これらの論考で必ずしも明らかにはされていないと思われる。今回はこの問題を明確にすることに絞るが、この論点が今後のより包括的な研究の一助になればよいと思う。

#### 1. 言説における二つの否定性

『言説， 形象』においてリオタールは、「言語活動(language)」<sup>2</sup>に含まれる「読むべきテクスト的なもの」と「見るべき視覚的なもの」の差異を強調している。われわれは通常、「読む」と「見る」という行為を分けて考えているが、リオタールはこの区別を原理的に強調するのである。ジェフリー・ベニントンはリオタールに注釈する形で、ひとまずこの区別を次のようにまとめている。

[...]原則的に、感性的対象としてではなくテクストとして本を読み、取り扱う限りで、わたしはページに印刷された諸記号の造形的価値にはいか

なる注意も払わない。すなわち、わたしはこれらの記号を即座に再認するのであるが、これが大事なことなのだ。もちろん、シニフィエの透明性という観念に、イデアリズムの痕跡を、あるいはデリダがより厳密に公式化しているようにロゴス中心主義の痕跡を確認することは可能である。しかし、その哲学的な妥当性がなんであれ、そのような透明性が読むことのもっともありふれた経験であるという事実は残る。テキストの空間はほとんど空間的でない。すなわち、それは平坦であり、諸記号は水平的隣接性の単純な規則に従って結ばれている。これに反して、世界という視覚的空間は複雑であり、多次的であり深く、わたしの身体が囲まれている空間を志向している。(Bennington, 1988:56-57)

ここでベニントンが言わんとすることは、「読むこと」と「見ること」は異なっており、それらを同時に行うことはできないということである。本を開き、そこに書かれた文章を「読みながら」、感性的対象としてのつやつやしたページの紙の表面を「見る」ことはできないであろう。

リオータルの「読むこと」は、彼が「意義(signification)」と呼んでいるものに関係しており、「見ること」は「指示(designation)」に関係している。リオータルの「言説」概念を理解するためには、まずこの概念が含みもつ「意義」と「指示」の二つの側面に注目せねばならない。

では、「意義」とはなんだろうか。ここでいう「意義」とは、簡単に言えば通常われわれが言語活動において理解しているものである。が、リオータルの場合、厳密にこれを構造主義的な観点から考察している。「意義」とは、ラングとして展開される連辞、範列関係によって規定される諸項の対立が保たれることによって再認可能になるものである。しかしこれはどういうことだろうか。ここには構造主義が前提としている「否定性(négativité)」が関係している。この否定性は、「実体なき関係論」というパラダイムに立つソシュールが、「言語記号の恣意性」の論理的帰結として打ち出した示差性としての否定性である。ソシュールによれば、言語の仕組みとは0か1か、AかnonAかのデジタル的機構である。つまりこれは、言語体系を為している個々の辞項は実定的に存在しているのではなく、その辞項とは異なる辞項との相互対立関係によって初めて成立すると

いうことである。そうであるならば、ある言説で用いられた辞項は、この「否定性」によって体系内の別の項へと送り返されると同時に体系内における相互対立関係に入る。この時この相互対立関係によって「nonA」として取り出されるもの、これこそが「意義」なのである。ソシュールにおいては、このような記号の否定的な存在様式こそが「意義」を可能にするとされるのだ。

しかし、言説に含まれる「否定性」は、このような構造主義が前提にする「否定性」だけなのであろうか。あるいは言語について考察できることは、ラングによって決定される「意義」のみなのだろうか。そうだとしたら、われわれが言説を用いて表現したり、何かを指示したりしていることをどう考えるべきなのだろうか。リオタールは、言説にはまた別の「否定性」が含まれていると考え、次のような問いを呈する。

否定とともに、話すことと見ることという二つの経験の交差点に反省が定着する。それが交差点なのは、両者が交錯するからである。一方では、クローデルが目は聴くと言ったように、口が見る。これがなければ、なにかを言ったとしても、何について語ることにもならない。見えるものの奥行きへと送り返す、言語的指向が存在するのだ。そして他方では、もし人間の言語に恣意性の原理が存在しなかったら、その内的な隔たりに全面的に依拠した体系の自足が無かったら、それゆえ言説とその対象との離別を引き起こし支えられる自足が無かったら、表と裏によって事物を厚みにおいて構成するこの奥行き自体、いかにして可能になるのか。語らなかつたら、ひとは見るのであろうか。(Lyotard 1971: 27=2011: 29)<sup>3</sup>

ここでリオタールは、言語は恣意性の原理によって自足していると述べている。しかしその一方で、言語には、見える対象を指示する言語的な「指向(référence)」があると述べている。対象へと開かれながら、自足した言語体系でもあるというこの言語が持つ矛盾を、どのように考えればよいのか。リオタールはこの問いに対して、「言説」という概念によって答える。リオタールが語る「言説」とは、奥行きを構成する「指示」と、言語体系の自足を支える「意義」が、連絡し、交錯する場なのである。

「言説」が意義に関係しているというのは上の説明で既に十分であろう。しかし、「言説」が「指示」に関係するというのはどういうことだろうか。この指示作用が最も明白に表れるのは、例えばエミール・バンヴェニストが考えるような「指示詞」を含んだ「言説」である。指示詞とは、「わたし」、「あなた」のような人称代名詞、「これ」、「あれ」のような代名詞、あるいは「いま」や「ここ」といった語をさす。これらは発話者の立場や文脈によって、そのつど指示対象を変えるという特徴を持っている。例えば、「ここ」という語は、時には家で、時には木のそばで用いられる。すなわち、そのつど指示対象を変えるのだ。この時、「ここ」という指示詞は、「家でもないし木のそばでもないもの」として、つまり示差性としての否定性を通じてあるような「一般的なもの」としては定義することが出来ないというのがリオタールの論旨である。これを言い換えれば、言語体系に属する他の項との否定的な関係によっては、指示詞の意義を規定することはできないということである。指示詞は、他の項との否定的な対立関係によって機能するのではない。それは、「感覚的確信」によって機能する。すなわち、ちょうど人差し指を前に向ける運動によって、その先へとひとが視線を移動させるように、言語を奥行きある感覚的な領野の経験へと開くことによって指示詞は機能するのである。

すると、指示詞が言説内において機能する場合に働いている否定性は、構造主義的な否定性ではないということになる。指示詞は、間違いなくラングのなかに登録されているにもかかわらず、構造主義的な否定性によって機能するのではなく、「指示」に含まれる否定性によって機能するのだ。リオタールはこれについて次のように述べている。

指示や指向は、厳密な意味でのラングの事実にはではなく、言説の事実内に在する否定性である。[...] この否定性はそこに明示的に現前しているのではなく、志向性としてそこに含意されている。指示の関係を支える否定は、言説とその対象のあいだに生じる分裂であり、われわれに語るべきものを与える。というのもわれわれは、われわれがそうでないものしか語る事ができず、語る必要もないからであり、逆にわれわれが語りえないもの、それがわれわれであるのは確かだからである。(Lyotard 1971:120=2011:

では、この「指示」に含まれる否定性とはなんだろうか。これについては注意が必要であり、一筋縄ではいかない。なぜなら『言説、形象』では、この否定性について二重の説明がなされているからだ。上の引用で「志向性」という言葉が用いられているように、一方では、この否定性は現象学、とりわけメルロ＝ポンティ流の現象学に依拠して説明されるのだが、他方でこの問題に「形象」の議論が関係してくると、精神分析的説明がこれに上書きされる。本論では、この否定性に関する精神分析的な議論の吟味は後に譲り、まずは現象学的な議論から考えてみることにする。

この「指示」に含まれた否定性は、空間に位置づけられた身体が為す知覚そのものに含まれていると言える。リオタールはこれを「見えるもの、距離、空間を構成する「間隔設定 (espacement)」に含まれる否定、可変性のうちで感じられる否定」と表現している。また同時に、それはメルロ＝ポンティの言う意味での「肉 (chair)」において醸成されるとも述べている。端的に言えば、この否定性は、メルロ＝ポンティが「肉」の「裂開 (déhiscence)」と呼んでいるものと考えてよいと思われる。メルロ＝ポンティの「肉」の概念においては、見るものと見られるもの、触れるものと触れられるものは、表裏一体をなすかのように記述されるが、また同時にそれらの二項は、塊としての一つの身体が己を分裂させ、切開する運動と不可分であるため、互いに覆い合い、蚕食し合ってもいる。リオタールが否定性という語で述べようとしていることは、この「肉」の「裂開」の運動のように、見るものと見られるものといった絡み合った二項を同時に生む間隔設定の力である。それはまた、客観的な空間と身体の永続的発生でもあり、さらに言い換えれば、何か見るべきものが存在するための超越論的な否定性であるとも言えるだろう。つまり、主体を「見えるものの奥行きへと送り返す、言語的指向」に含まれる否定性とは、「示すものと示されるもの」という絡み合った二項を与える、言説と対象のあいだに生じる分裂である。またそうであるならば、今私たちが問題にしている「否定性」が、前述した「言語記号の恣意性」とは相容れないということは明白であるように思われる。

さて、指示詞の問題に戻ってこの違いをより詳細に見てみよう。まずもって

強調すべきことは、指し示された場所である「ここ」は、おそらくその中心としての感覚の領野において把握されるが、それは言語体系内の辞項の選択の場合にそうなるように、その周囲が除去されるような仕方では把握されるわけではない、ということである。構造主義的な否定性によって捉えられる意義は「nonA」として、項の切り離しを前提にしている。これに対して、指し示された場所である「ここ」は、「示されるもの」として「示すもの」に絡み合いながら視野の縁にたたずんでいる。つまり「ここ」は、ある一定のパースペクティブから眺められる対象として、視野の縁の曲線のうちに現前しているということである。このことを言い換えれば、次のようになるだろう。すなわち、一方で言語体系内の辞項は、それぞれがある一定の間隔を保って切り離され、またその非連続的な辞項が相互に対立することによって意義をもつ。これに対して指示詞である「ここ」は、感覚の領野で「射影(Abschattung)」するものとして把握される視野の奥行きへと送り返すことをその機能とする。つまり指示詞で示される「ここ」は、周囲との地平的構造によって把握されるのである。端的に言えば、「ここ」はある種の連続性を伴った奥行きによって把握され、切り離しを前提とする言語的辞項とは機能の仕方が異なっている。

さて、リオタールによれば、「言説」は「意義」と「指示」に含まれるこれら二つの「否定性」を含むのであるが、ここから「言説」の構成要素を考えることが可能になる。すなわち、「言説」の基本構成要素は、「シニフィアン」、「シニフィエ」、「指示されたもの(designé)」の三幅対である。この関係が何を意味しているかをここでまとめておこう。リオタールは次のように述べている。これはわれわれが今まで確認してきたことが集約されたような一節である。

第一に、言説はつねに調整された隔たりの形式的空間にあること。この空間は、弁別単位の空間と表意単位の空間へと二重化される。第二に、言説は可動性と側面性が支配する指示の空間にある対象との関係によって常に定められること。シニフィアン、シニフィエ、指示されたものという三つの項が位置する意義と指示の二つの軸は、現動的な言説に同時に含まれている。(Lyotard 1971:283=2011: 426)

「シニフィアン」, 「シニフィエ」の項に対応するのは, 言説の水平軸で展開される示差性としての否定性である. そして「指示されたもの」に対応するのが言説の垂直軸で展開される志向性としての否定性である. リオタールの「言説」という概念は, 水平軸(示差性としての否定性)と垂直軸(志向性としての否定性)の交点として, 意義と指示の二つを含むものなのである.

## 2. 志向的否定性への欲望の上書き

前節では, 「指示」に関する否定性を「現象学」に結び付けて考えてきた. しかし既に述べたようにこれがこの否定性の全てではない. 『言説, 形象』ではこれに精神分析的な議論が接続され, 上書きされるのである.

この問題が本格的に展開されるのは, リオタールによるフロイトの「否定」論である. この「否定」論において, 今まで「現象学的否定性」としてのみ語られていた言説の指示機能に, 欲望の問題が塗り重ねられる. 本節では, 指示による「間隔設定」に含まれる精神分析的な問題を考察したいと思う. そのためにまずは, フロイトの「否定」論を簡単に振り返っておこう.

1925年にフロイトは「否定(Verneinung)」という短い論考を発表する. 精神分析において「否定」とは, 患者が今まで抑圧していた欲望や思考や感情の一つを表明しているにもかかわらず, それが自分に属していることを否定し, それに対して身を守り続ける態度のことである<sup>5</sup>. フロイトはこの論考にて, 否定とは抑圧されているものを認知する一つの方法である, と結論した. また, 否定象徴(Nein, non, no)によって, 思考は抑圧のさまざまな制限から解放されると述べた. しかしこれはどういうことだろうか. さらに具体的に見ていこう.

この論考でフロイトは, 患者が用いる否定に対する精神分析の解釈の論理的スキャンダルについて自問しているが, たとえばそのスキャンダルとは次のようなものである. 分析治療において, 患者は夢の内容について「それは私の母ではありません」と述べる. フロイトは, これを「よってそれはこの人の母なのだ」と訂正する. ポイントとなるのはこのようなやりとりである. この〈否〉から〈然り〉への転換は, 一見奇妙であり, 論理的にはおかしなやりとりである. しかし精神分析において否定は, 否定判断としてだけ把握されるだけでなく,

抑圧されているものを見ることを拒む表現としても理解されるのである。

さて、このフロイトが聞き取る患者の〈否〉は三重化されているとリオータルは述べている。リオータルは、この否定は統辞法的否定、構造的否定、志向的否定として存在していると述べる。ここで言う統辞法的否定とは、否定命題に明らかな、文法学者と論理学者の否定である。また、構造的否定とは、われわれが第2節にて確認した、構造主義的な水平的否定性のことである。そして志向的否定とは、言説と対象のあいだの分離に伴うものとしてひとまずは考えておこう。この三つの否定に関する区別は重要なので、少し詳しく見てみよう。まず、患者が「それはわたしの母ではありません」と言うとき、患者は否定の文法的使用によって、自分の夢の人物と自分の母という二項のあいだに排除の関係を打ち立てていると言える。これが統辞法的否定である。次に「構造主義的否定性」であるが、「それはわたしの母ではありません」という報告の中で、「母」という項は他の辞項「ではない」という形で機能している。よって「否」がここにも前提とされている。そしてもう一つの否定は、指示の否定性であり、これは言説の指示作用における間隔設定、距離化である。つまり、言説とその対象のあいだに生じる分裂である。言説はつねに何かについて語っているのであり、患者がどれだけ否定を重ねようとこの事実は変わることはない。つまり、「抑圧されていた欲望や思考や感情の一つを表明」という精神分析的前提を立てれば、この否定には対象定立の機能があることになる。これは否定において、言説とその対象の分離の運動が生じ、「なにか」が暗に定立されるということである。これら三つの否定が欲望を抑圧する否定象徴のうちに含まれているとリオータルは主張する。そして、「それはわたしの母ではありません」という報告の内に見られるこれらの否定の連関を、リオータルは次のように説明する。

患者が自分の夢の対象が自分の母であることを否定しなければならないのは、欲望は恒常的な間隔設定の侵犯をはらむという意味で、夢は欲望の成就であるという意味で、その夢が実際に母の否定だからである。母は原則として欲望の外に位置づけられた女性であり、そうした女性を夢見ることは禁忌を回避することであり、彼女をタブーである相手という本質において削除することである。自分の母を夢に見たことを弁解しながら、患者



は実際に「失われた対象」として、自分が語るものを言説として構成または再構成することに取り掛かり、夢と欲望の平面から離れて認識の平面へと移行する。患者は、あらゆる言説とあらゆる客観性の以前にあると想定されるものと距離を置くことで、つまり母との生来の同一化の破棄によって言語の秩序を再び確立し、言語が準拠する客観性の秩序を再び確立する。患者の否定は、ラングの条件たる否定を表現するのと同様に、言説の可能性たる否定を反復している。(Lyotard 1971:122-123=2011: 180)

この一節を噛み砕くと次のようになる。ラングの辞項の恒常的な間隔設定において把握される母は、原則として欲望の外に位置づけられた女性のはずである。つまり、「母」と「欲望の外に位置づけられた女性」は換入可能だと言ってもよい。しかしそうだとすれば、夢が欲望成就である限り、「母の夢」はラングの恒常的な間隔設定を捻じ曲げてしまうことになる。なぜならば、「母の夢」とは、「欲望の外に位置づけられた女性である母を欲望する」ということであるからだ。これは論理的矛盾であると同時に、ラングの辞項の恒常的な間隔設定の侵犯であり、認識の規則の違反である。ラングの恒常的な間隔設定を守るならば、「欲望することができれば母ではないし、母であれば欲望できない」となるはずだ。以上のことが、患者の夢の対象が自分の母であることを否定しなければならない理由である。

患者が、自分の夢の対象が自分の母であることを否定するのは、夢が可能にする認識の規則の違反に対して、言語の秩序が再び確立されるからである。夢が可能にする検閲の緩みのなかで、主体は退行するのだ。精神分析において退行は、三つの意味が折り重なった形で用いられている。まず第一のものは局所論的意味である。フロイトによれば、退行は一定の方向への興奮の正常な流れの逆行を意味する。興奮は、覚醒時においては心的装置の体系を知覚から運動性へと進む。しかしこれとは逆に睡眠時においては、運動性へと近づくことを拒否され、知覚という体系にまで退行するのである。次に時間的意味の退行がある。この意味での退行は、簡単に言えば「幼児帰り」である。これは主体の発達史的連続性を仮定したうえでの、その初期段階における心的構成への回帰を意味している。最後に形式的退行と呼ばれるものがある。これは言語を用いた

通常の表現の様式が、原始的な様式のものに置き換わる場合を言う．ところで、これら三種の退行は根本的に同じものであり、多くの場合一緒になっている。なぜなら、時間的に古いものは同様にその形式においても原始的であり、局所論的にいっても知覚末端の近くに位置しているからである。

このような退行のなかで主体は、ラングの諸項の恒常的な間隔を侵犯し、無視し、捻じ曲げる。そして禁じられた相手である母の幻想へと向かうだろう。というのもフロイトは、夢の映像の形成は、視覚性が本質である幼児光景に牽引される形で為されると主張しているからだ。フロイトは、夢において思考が視覚像に変わる理由は、意識から離れて自らを表現しようとしている思考に、よみがえろうとする視覚的記憶が牽引力を及ぼすからであるとしている。よって夢がラングの恒常的な諸項の間隔を捻じ曲げるのも、退行した主体の心的装置が知覚の方へと退行し、幼児光景がよみがえろうとする思考に牽引力を及ぼすからである。

さて、リオータルは、患者の否定は言説の可能性たる否定を反復している、と述べている。「言説の可能性たる否定」というのは、客観性が確立されるために必要となる母との生来の同一化の破棄のことである。またそれが反復であると言われているのは、夢が可能にする母への欲望が、患者の否定によってもう一度切り離されているからである。繰り返しになるが、この患者の(再)否定によって言説の主体と対象に間隔が設定され、ラングの辞項の恒常的な間隔が守られるのである。

そしてここに重要なことがある。否定とは「客観性が確立されるために必要となる母との生来の同一化の破棄の反復である」といわれるとき、現象学的に考察された志向的否定性＝「言説と対象の分離」に、精神分析的な観点が上書きされているのである。リオータルによれば、そもそも「指示されるもの＝対象」の確立は、言語への参入の結果としての言説に含まれる志向的否定によって生じる。「快原理の彼岸」でフロイトが提示した「fort-da」遊びの例を注釈しながら、快原理に支配され弛緩と緊張の＋と－を振動する快自我が、志向的否定によって対象を確立すると述べられている。引用しよう。

子供が言語に参入するとともに、快の＋と－は指示によって開かれる座標

軸上へと移行可能となり、可視的な対象としての母との距離を保ちうるようになる。この距離はまさしく奥行きである。なぜなら子供は糸巻きによって、対象がフレーゲの望遠鏡における月のように二つの面をもっていることを感得するからである。対象はひとつの面によって自己を与え、もうひとつの面において自己を永遠に保存する。糸巻きの上に構築されるこの奥行きが客観性のモデルであり、母もまたそれに従う。「現実」とは逃げ去るものなのだ。ところで事物の裏面をなすこの脱落は、〈いない〉と〈いる〉、〈否〉と〈然り〉があるという理由のみで定立されうる。なぜなら不在と現前の最初の対立のおかげで、語る存在はみな、その言説のうちにかつ言説によって、存在しないものを定立できるようになるからである。(Lyotard 1971:126=2011: 185)

ここで言われていることは、母との生来の同一化状態から言語の場へと参入することで、言説と対象が分離し、奥行きが生まれ、認識の秩序が確立するということである。〈否〉と〈然り〉の意義の空間は、指示されたものを失われたものとして構成し、所有することなくその対象に遠くから触れ、対象の見えない面を想定することを可能にし、対象を厚みのある記号として構成することを可能にするのだ。また同時にここが重要なのだが、失われたものとして対象を定立する限りで、この距離を取り返そうとする欲望もまたこの時同時に発生しているのである。「それはわたしの母ではありません」の例でみたように、否定象徴によって母との同一化状態を解消され、言説と対象は分離されるが、この志向的否定性によって開かれたこの距離の間には、欲望が存在しているのである。

しかしこのように「志向的否定性」に欲望の議論が絡んでくると、既に考察した「言説」と「指示されたもの」の関係はより複雑になる。というのもこの場合、言説の主体は、志向性のように単に「指示されたもの」の裏面を追いかけるだけではないからだ。主体は退行し、幻想に備給し、ラングや認識の規則を「侵犯する」夢のヴィジョンを上演するからである。そしてこのような、退行における言説の「侵犯」こそが、リオタールが述べる「形象」なのである。リオタールは次のように述べている。

意義は意味の全てではないが、意義と指示を合わせてもやはり意味の全てではない。われわれはそのあいだに言説が滑り込む二つの空間、すなわち体系のそれと主体のそれとの二者択一にとどまることはできない。もうひとつ別の形象的空間が存在する。この空間は埋もれたものとして想定しなければならない。それは姿を見せず、思考されることもなく、言説や知覚内でそれらを乱すものとして、側面的にはかない仕方では自己を示す。それは欲望に固有の空間であり、画家と詩人が〈エゴ〉とテキストの回帰に抗して絶えず行う戦いの争点である。(Lyotard 1971:135=2011: 191)

要するにリオータルが考える形象的空間とは、意義の空間と指示の空間を連絡している言説を、「下から」攪乱する欲望の空間である。

ところで欲望は、二次過程において「指示されたもの」に向かうか、一次過程に退行し幻想に備給するかのどちらかである。また形象的空間が言説の「侵犯」によって垣間見えるのはこの退行によってであるが、リオータルは、この欲望の二つのあり方が科学と芸術の対立を生むとする。覚醒した主体の言説は科学の言説となり、退行した主体の言説は芸術の言説になるのだ。彼は次のように述べる。

あらゆる言語は本質的に非言語へと開かれている。認識の言説は事物の方向への超越を必要とする。この超越の内部で、言説はその対象を追い求めるのである。芸術の言語は、像に由来するこれと対照的な超越を必要とする。そうした像は、芸術の言語の語に住み着くことになるのである。一方には定義する言葉、指示されたものを構造の普遍の関係へと組み込み、それを完全にシニフィエに同化しようとする言語がある。他方には視覚と欲望の空間に身を開き、シニフィエでもって形象を作ろうとする言葉がある。どちらの場合も、それは自己がそうでないものによって魅惑された言語であり、それを所有しようとするのが科学の幻想、そのように存在しようとするのが芸術の幻想である。(Lyotard 1971:108=2011: 156-157)

ここで科学の幻想と言われているのは、ラング＝認識の規則内での総合判断による、

「指示されたもの」の裏面の探求である。これに対して芸術の幻想と言われているものはなにか。これは、最深部の幻想を反復するために、言説内に「形象」を退行によって上演させる試みである。リオタールは、「試作品は形象によって加工されたテキストで構成されたものとして特徴づけることができる」と述べているが、これはしばしば「前衛」と呼ばれる詩作品が、退行によってラングの秩序を侵犯する「形象」を作品内に生み出すからである。よって、「言説」に対する形象の効果は上で見たように否定象徴に現れるだけではない。それは詩作品(芸術作品)にも表れるのである。

## むすびに代えて

本論では、「否定性」と「退行」という概念をとおして、リオタールが「言説」概念をいかに「形象」概念に結び付けているかを確認した。最後に、この論点が今後どのような問題につながっていくかを示唆して終わりにしたい。実は今まであまり触れられてこなかったが、リオタールは『言説、形象』のなかで「退行」と「脱構築」を結び付けて考えている。これは、「指示されたもの」=「感覚的なもの」についての現象学的な議論を、精神分析という異なる議論の場へと「土俵替え」することによって為されている。しかし、そもそも言語における「指示」の次元も構造主義に対する脱構築的戦略によって取り出されているのであるから、『言説、形象』には「感覚的なもの」を取り巻く複数の脱構築的实践があるということになる。リオタールが1971年という非常に早い段階で「脱構築」という戦略を用いていることは興味深く、またそれが単に「デリダの脱構築」の形骸化ではないということは間違いないと思われる。今後は初期脱構築研究という観点から『言説、形象』を読むという取り組みが必要であると思われる。

## 註

1. Bennington, G, *Lyotard : Writing the Event* と、Bill Readings, *Introducing Lyotard: Art And Politics* を参照。
2. ソシュールの概念を念頭に置いている。
3. 参照については、著者名 原著出版年：ページ数＝訳書：ページ数の順で表記した。
4. ラブランシュノボンタリス『精神分析用語辞典』村上仁 監訳、1977年、みすず書房を参照。
5. この最深部の幻想が、リオタールの言う「形象 - 母体」であるが、これについての議論

は別の機会に譲る.

### 文献表

Bennington, G, 1988, *Lyotard : Writing the Event*, Manchester University Press

Readings,B, 1991, *Introducing Lyotard:art and politics*, Routledge

Lyotard, J-F, 1971, *Discours, Figure*, Klincksieck(=1989, Minuit(=2011, 合田正人監訳, 三浦直樹訳, 『言説, 形象』, 法政大学出版会)